
拉致られて、捨てられて

朝寝坊太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拉致られて、捨てられて

【Nコード】

N8010Y

【作者名】

朝寝坊太郎

【あらすじ】

フツーに生きていた、俺、黒川 優太は、異世界に勇者として呼ばれる時、勇者になれる可能性なしと判断され捨てられた。どーすんの俺！

ブログ

大学受験を控えた、冬休み。

俺は、夜食買いにコンビニ行き、そして

「いやいやなぜに」

魔方阵に飲み込まれ、

《勇者候補を発見、接続開始・・・完了》

《成功、精神改造開始・・・終了》

《隷属の首輪設置開始・・・対象に魔力がないため失敗》

《魔力がないため勇者になれる可能性なしと判断》

《捨てることを開始》

《場所、下竜種の近くへ》

《成功・・・呪い発動・・・成功》

《解呪方法下竜種の殺害》

《次の勇者候補へ》

それが、日本で聞いた最後の声？だった。

第一話 状況確認

『起きてくださいマスター』

「誰だよ！」

誰もいないのに話かけられた俺は、超びびった。
周りは、森で木が多い。

『こちらです。マスター』

「いや剣しかないんだけど」

そこには、切れ味のよさそうな剣が一本しかない。

『それです。私は、その剣に内蔵された人工精霊7、889と申します』

「それで、ここどこ。変な声聞いたから色々分かるけど」

それに俺は、普通こんな変なことに巻き込まれて落ち着いてらなかつたのだが。

『ここは、アイリア王国のはずれの森です。マスターには、精神改造がなされていますのでマイナス方面には、悲しみや理性が失われることは、ありません』

「心を読んだのか」

その場合とてもまずいのだが。

『はい。精神改造をしたときにパスを繋ぎ心が読めます』

「どこまで俺に、情報を渡しても大丈夫だ。それとその情報は、本

当なのか」

『私の製作者以外のすべての情報は渡しても大丈夫です。正確さは、私の入っている情報は入れた情報が正しいのならすべて正しいです』

本当に信用してもいいかわからないが、頼れる者？が、少ないため疑いつつ頼る。

「お前の受けた命令はなんだ」

『マスターを助けること。それ以外は、ありません』

なぜそんなに命令が少ない。

『理由は、魔力がある人には隷属の首輪がされますから』

「お前は、心が読めるのだったな。それと魔力と何が関係する」

『魔力があると魔法が使えます。魔力がないのは、異世界人だけです。魔力のない人見下されます。魔方阵に捉まったら最後こちらに必ず呼ばれます。ですから呪いが掛けられます』

「あの下級竜の殺害か？」

竜と言われるにだから強いのだろうか？

『そうです。それと強いです』

「はぁこれから頼む」

ため息をつきながら自らの相棒？にそう言った。

第二話 状況確認2

『はい。よろしく願います。他に聞きたいことは、ありますか？』

聞きたいことは、まだまだたくさんある。

「勇者候補とは、なんだ？」

『勇者候補とは、現在確認されている上位世界28903個から、勇者になれる可能性を持っている人物を一万ランダムで召喚されます』

上位世界とは、自分達の世界より発展した世界のことだそうだ。

『勇者は、魔王を殺すため呼ばれます。ですが魔力を持たない人間に隷属の首輪は、付きませんので呪いを掛け捨てます』

魔力を持たない人間は、70億分の一ぐらいの確立で滅多にいない、上位世界の人間は五人に一人勇者候補らしい。

・・・俺、運がないわー

「ここら辺は、安全か？」

『はい。ですが食料を調達することを進めます』

確かにそうだ。

「飯、洗濯、風呂、トイレは？」

『食料は、調達します。洗濯、風呂は、私の機能を使えば問題ありません。トイレは、こちらに来るときに食べたものは、すべてエネ

ルギーに変換されるようになっております』

便利だ。

『それでは、食料調達に行きましょう』

そして俺は、森の奥に入っていた。

すべての木が自分の身長 of 10 倍以上ある。

俺の身長は、178cm ぐらいだ。

あった。木の実だ。

とても赤くて、うまそうだ。

『それは、毒があるので罠に使えます。魔物は基本知能がないので』

毒らしい。食えない。

そういえば、竜の話を聞いていなかった。

「竜は、どのくらい強い」

『竜は、下竜種でもBランクと非常に強いです。マスターだと年単位で修行しなくては いけません』

竜は強いらしい。

年単位この森で暮らすとなると少し悲しくなっていく。

黄色い木の実があった。拾う。

『毒です』

また毒らしい。体がしびれる毒なのだそうだ。

きのこを拾った。毒キノコだ。

大きな音がし始めた。水の音だ。

『この先に、川があります。その近くで生活したほうがよいでしょう』

たしかにのどが渴いた、魚もいた。

手でつかもうとする。

逃げられる。

もう一度・・・にげられる。

もう一度・・・逃げられる。

もう一度・・・捕まえた。

『調理方法次第でおいしくなりますが、毒があるため危険です。食べないでください』

「なんでだよ！何でこんなに毒ばかりなんだよ！おかしいだろ！」

俺は、思わず叫んだ。しかし・・・

『マスターあの木の上にあるのは、食べられます』

「やっとか！ありがとう。これで飯が食える」

俺は、腹がいっぱいになり、寝ようとした。

「何かあったら起こしてくれ」

そついい俺は、寝ようとして木に寄りかかった。

第三話 初戦闘？

おれが、ウトウトしてきた時

『マスター起きてください。魔物です。スライムですが』

魔物の中のザコ。

ゲームの中のザコ。現実では・・・

『ただのスライムだったら怪我はしません。安心して斬ってください』

現実でも、弱かった。

姿は、ゲームのようにかわいもなく、ただの球体。に、触手がうねうねしている。

気持ち悪い。

「刺してもいい」

できるだけ触りたくない。

『殺してくれるなら、どちらでもかまいません』

刺した。死なない。

『スライムは、核以外を攻撃しても死にません』

赤い球体目指して刺す。

ぐったりしている。

結晶を残して消えた。

「ゲームじゃねえか！」

死骸すら残さず消えたため、俺は思わず叫んでしまった。

『魔物は魔族の奴隷として生み出されたため結晶以外あまり残しません』

詳しく話を聞くと、

魔物は魔力で作られたため普通の生き物と違い消える。

結晶は、その魔物の心臓のようなもの。

他にも様々な核などは残る。

スライムだったら結晶の他に俺が刺した核などが残る。

『スライムは、亜種以外は、危険がないため安心して練習してください』

亜種になると魔力ではなく、肉の体を手に入れるため魔族になるらしい。

『スライム基本、雑食なので核には栄養がたくさんあります』

「ビタミン剤か！」

また叫んでしまった。

しかし、普通の人間は魔物の核を食べないらしい。

けれど、果物だけの生活になるため俺は食べると決めた。

一個一個が少ないためたくさん殺さないといけないが、スライムは大量にいるらしい。

まさにゲームのようだ。

教えられた。

『今の私では、竜のうろこも刺さらないし、斬れません』

俺は、魔力結晶をすべて剣に入れると決めた。

そしてまたスライム殺し始めた。

刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。

刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。

刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。

「俺は、なぜスライム相手に俺TUEEEしてんだよ」

と、いいながらも刺す。

そして5000匹ぐらい刺したところで、

《スキル【刺す】L V 1を習得しました》

《会得条件は、刺すことです》

《これから刺す時には、威力が上がります》

と、言う音が頭の中に響き、

「今度はいつたいなんだ！」

大声で叫んだ。

第四話 スキル

『落ち着いてください。マスター』

落ち着いていられるか！

この世界に来るときに聞いた声？を聞いたんだぞ、こっちは、

「今のはなんだ」

『今のは、スキル会得情報を教えてくれる神々プログラムのアナウンスです』

なんで、この世界の人工精霊とか言う道具がプログラムだの、アナウンスだの知っているんだよ。

『言葉は自分のしっている言葉に、自分が話す言葉は、この国々の言葉に変換できるように、この世界に来るときにそういう風に改造されているからです。』

心、読まれてるんだっとな。

つか、神なんているんだったら神に魔王を殺させるよ！

言葉に関してはナイス！竜殺すまでに覚えるつもりだったからな。

「スキルって何」

『スキルとは、神々のご褒美のようなものです。研究はされています。しかし詳しいことは不明です。分かっていることは、スキルの効果は、すさまじいこと以外わかりません』

「他に分かっていることは？」

『会得条件と同じことをすればレベルが上がり、強力になっていきます』

刺すことが

『また、それぞれ会得条件が違います。ですのでさまざまなことを行いスキルを得てください。魔力がないマスターでは、スキル以外で竜を殺せません』

最悪俺は、刺すを使って竜を殺すことになるのか

『スキルの上位には、称号があります。これは、こちらの世界でも持っている人はあまりいません。こちらでも会得条件が人さまざまです』

「とにかく戦闘では、いろいろな事をしつつ、刺すを使うということではないか？」

『そういうことでお願いします。またこの世界の人々は、最低でも30〜50のスキルを持っています』

「多いな」

『先頭に使うものだけでなく、日常でも使えるもの、作る時に役立つものと、多岐にわたってスキルは、ありますので』

魔物を使って確認してみるか。

スキルってどう使うんだ？

『放出系と違いマスターが、会得した刺すなどはつねにこうかがあります』

スライムを見つけ、刺す！

一撃で核にあてる事ができた。

落ち着け俺、もう一度だ。

核にあたった。

二匹連続で、刺す！

核にあたった。

十匹連続で、刺す！刺す！刺す！刺す！刺す！刺す！刺す！刺す！刺す！刺す！

あたった。命中率も・・・威力も多分かなり上がっている。

スキルって便利だ・・・

これからは、スキルを得るためにいろいろな事をして、スキルのレベルを上げよう。

第五話 戦闘

筋肉痛になったりしたため、5日ほど休んだあと、スキルを得るために、魔物を探す。

『そろそろ奥のほうに行き、ゴブリン等の攻撃手段を持っているEクラスの魔物を倒しに行きましょう。戦闘に、慣れてください』

そういわれ、ゴブリンを探しに向かう。

木がたくさんあり、薄暗くなっていく。

しかし、ここに来てはまだ森の出入り口付近らしい、広い

そうして歩いていると、緑色の小さな70〜80cmぐらいの生き物が見えた。

『あれです。数が多いので気をつけてください』

7、8匹いる。とても顔が怖い。

小さいが刃物を持っている。

後ろにそつと近づいて、刺す！

一匹殺した。ゴブリンから、剣を引き抜いていると、ゴブリンが来ている。

少しかすってしまった痛い。

『マスター、剣で首をはねてください。そうすれば、すぐ殺せます』

首を刎ねる。首を刎ね、首を刎ね、首を刎ね、首を刎ね、首を刎ね、首を刎ね、首を刎ね、首を刎ね、首を刎ねる。

《スキル【首はね】LV1を会得しました》

《会得条件は、首を刎ねることです》

《これから首を刎ねるとき、威力が上がります》

うわ、早、スライム5000匹殺してようやく【刺す】のスキルを得たのに今度は、十匹かよ。

『マスター逃げてください。ゴブリンは、まだ近くにいますから』

俺は、ゴブリンから逃げた。

切られたところが痛い。

「今度はあれを狙って、楽に殺せるようになるまでしたほうがいいか？」

『はい。まだマスターは、Dランクを殺せないと思えないのでゴブリンを相手に特訓してください』

そういわれながら、結晶を入れる。

「あと、どのくらいでお前の切れ味は上がる？」

『Eランクの結晶ですと、1万個でようやく少し上がる程度です』

先は、まだまだ長い。

ゴブリンがいたところに行き、後ろから首を刎ねる。

今度は、慣れてきたため30匹ぐらいを殺した。

殺していた。

そうしたら、

「おいおい、これはねーだろ普通」

100匹ほどに囲まれていた。

『すみません気がつきませんでした』

やばい、リアルで命の危機を感じる。
近くにいたゴブリンの首を刎ねる。
違うゴブリンが、切り付けてくる。
避けながら、首を刎ねる。

「恐ッ」

ゴブリンの攻撃が恐い。
理由はなぜかというと、
ゴブリンは、小さいため腰の辺りの来る。
とても恐い。

『落ち着いてください。ゴブリン100匹程度ならどうともなりません』

「了解」

そう言いつつ首を、刎ねる！

30匹程度さらに殺した事で疲れてきてしまった。が、

《スキル【首刎ね】LV1がLV2になります》

《【首狩り】LV2になりました》

《【首狩り】になったことにより速度が上昇します》

そして俺は、一瞬で三つの首を狩りとった。

第六話 資質

一気に首を三つ狩り取り、人工精霊が、

『一ヶ所だけその速度で逃げましょう』

と言った。

その声で方針を決める。

「一気にいくぞ！」

そう声を上げ、自分を勇気づける。

そうしないと、不安で死にそうだ。

ゴブリンの首を刎ねながら駆け抜ける。

ゴブリンが追ってこない。

スキルが進化してからものすごく早くなった。

「研究が進んでいないらしいが、今回なぜスキルは進化した」

『おそらく、マスターの資質に関係するものかと思われます』

「資質とは何だ。」

『資質とは、その人間が最も伸びやすくなる原因のことです。その条件を満たすと異常に上がりやすくなります。その原因はさまざまで、精神状態により変わります。さらに能力すら会得しやすくなります』

精神状態で変わる。

俺の条件は、何なのだろうか。

『また、条件を満たす人はなかなかいません。見つけるのが困難な

ためです』

あの時俺はどんな精神状態だったのだろうか？

『マスター、食事にしましょう』

なぜこんなときに食事なのかわからないが、腹が減った。腹が減ったのに気付いてしまったら余計腹が減った。やはり、果物オンリーしかない。肉、やはり肉が食いたい。魚でもいいが、

『マスター、スライムの核も食べてください。すべてです』

今スライムの核の数は、58個だ。

「わかった」

そんなに栄養がないのだろうか。

りんごのような果物やバナナのような果物しかないから当たり前かもしれないが。

大量に食べる。うまい。のども潤う。

スライムに核も食べる。

見た目は、5〜6cmになりグミのようだが、食感はぜんぜん違う。ゴムの塊のようで味がしない。

『あまり一気に食べると体に毒なので死ぬ恐れがあります』

40個ぐらい食べ終わったときに、そう言われた。

「ぶは。ゲホゲホ」

もちろん俺は、吹き出してしまった。
命の危機があると言ったため怖くなった。
そしたら、

《能力【再生】 L V 1 を会得しました》

《この能力により、怪我をしても死なない限り治り続けます》

能力を得て、人工精霊に、

『マスターの資質条件は、死の恐れのです』

と言われて俺は、

「ふざけんな！」

怒鳴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8010y/>

拉致られて、捨てられて

2011年11月26日20時52分発行